

養護学校における美術の教材に関する考察（2）

秋山泉⁽¹⁾ 福田隆真⁽¹⁾ 宮崎龍次⁽²⁾ 石川昭枝⁽³⁾ 島田憲貢⁽⁴⁾ 玉川佳寿美⁽⁵⁾ 浜崎佳代子⁽⁶⁾

A Study on the Learning Material of Arts and Crafts in School of the Handicapped 2

Izumi AKIYAMA⁽¹⁾ Takamasa FUKUDA⁽¹⁾ Ryuji MIYAZAKI⁽²⁾ Akie ISHIKAWA⁽³⁾
Noritsugu SHIMADA⁽⁴⁾ Kazumi TAMAGAWA⁽⁵⁾ Kayoko HAMASAKI⁽⁶⁾

はじめに

この報告は、先の「養護学校における美術の教材に関する考察」¹⁾に続く障害児教育における美術教育の教材研究である。この報告では「平版デカルコマニー」「色紙ぶろっくであそぼう」「スチレンボードによる版画」「お面づくり」の題材の具体的教材研究、および岩国養護学校における年間計画を事例として取り上げた。ここでは、発達差に開きのある精神薄弱児のクラスで、すべての生徒が造形活動の喜びを味わうことのできる美術の題材を目指して、その題材の意義を述べ、実践結果の考察を行うものである。

1 「平版デカルコマニー」

—発達差の大きいクラスにおける、同一教材による動機づけのために—

この題材を設定したクラスはMA 3～4歳児からMA 10歳児までの幅広い生徒で構成される高等部2年生のクラスである。描画発達段階では、前図式期から写実期までの生徒がクラス内に存在する。この様に発達差の大きいクラスでは同一題材での動機づけは困難であるので、やはり教材、教具による動機づけを試みた。この題材はアクリル絵の具による平版デカルコマニーである。

(1) 題材設定

ダリ、マグリット、エルンストラシュールレアリスムの画家は好んでオートマシズムの技法を用いた。偶然にできる模様から意識や理性の枠を越えるためである。従って、そこに表現される世界は作者や見るものの極めて個人的な感情に左右される。

(1)山口大学教育学部 (2)山口県立田布施養護学校 (3)山口県立田布施養護学校徳山分校

(4)山口県立岩国養護学校 (5)北海道中札内高等学校 (6)山口県立防府養護学校

この題材で取り上げる「ベッタンコ版画」とはそのオートマシズムの技法の一つで、平版によるデカルコマニーである。精神薄弱児は一般に抽象的思考が困難であるとされるが、この平版デカルコマニーから、生徒が感じ取る様々な個人的なイメージはその抽象的思考への糸口となり得る。「面白い」「きれい」「不気味な」「不思議」などの感情を、自分の作品から感じ取り、それを認識することで、抽象的思考が喚起されるのである。これらの思考は美術科においても「美しさ」を判断する点で、制作、鑑賞を通じて重要であり、この題材はその後の美術の授業にも多大に影響すると思われる。

また平版デカルコマニーの制作は、とても楽しく、魅力のある題材である。これらの活動を通して生徒達が制作の楽しさと、作品の不思議さを味わうことができるようこの題材を設定した。

(2) 指導にあたって

指導にあたっては以下の6点に留意した。

- ①導入では実際に平版デカルコマニーによる作品を見せ、その作品に対して生徒が持った感情を発表させる。この時、発表が容易に出てこないようなら、教師が具体的な感情を様々に述べて、その中から生徒に選択させる。
- ②平版デカルコマニーの制作には格別な技術は必要ないので、教師はむしろ生徒の内面表出や感性に注目して、励まししながら自由に制作させる。
- ③制作中に生徒が発する感情表現の言葉に耳を傾け、それを肯定してその抽象概念を生徒に植えつける。
- ④MA 3～4歳の生徒や自閉症的傾向のある生徒は、感情を表出する能力の発達が不十分なので、「きれいだね」などの声を掛けて、少しでも感情を理解、あるいは表出できるようにする。
- ⑤まとめとして作品鑑賞の時間を1単位時間以上設けて、自分の作品に対して抱いた感情を紙に書かせたり発表させる。また、作品のタイトルもその感情からイメージを膨らませて決定させる。
- ⑥事後指導として、エルンストラのデカルコマニーによる作品や、抽象主義の作品を鑑賞する時間を取ることが望ましい。

(3) 指導目標

・MA 3～4歳及び自閉症または自閉症的傾向のある生徒・・・Lグループ

- ①平面デカルコマニーの制作を楽しませる。
- ②制作を通して何らかの感情を抱かせる。

・MA 5～7歳・・・Mグループ

- ①平面デカルコマニーの制作を楽しませる。
- ②制作を通して様々な感情を体験させ、作品からイメージを膨らませる。

・MA 8～10歳・・・Hグループ

- ①制作を通して、様々な感情を体験させ、それを言葉で表現させる。
- ②自分の作品に対して抱いた感情からイメージを膨らませ、タイトルを決定させる。

(4) 指導計画

<第1次> ペットタンコ版画って何だろう？

- ・平版デカルコマニーの作品を見て、様々に感じたことを発表する。
- ・教師の試技を見て、ペットタンコ版画の制作方法を知る。

<第2次> ペットタンコ版画をやろう。

- ・1人4～5枚のB3色画用紙を用意する。
- ・プラスチック板の上にアクリル絵の具で自由に模様をつける。
- ・その上に色画用紙を乗せて、ずらす、剥がすなどして制作する。
- ・1版目が乾いたら2版目を同じ手順でその上から制作する。
- ・進行のはやい生徒は3版目または筆によるバック付けなどの制作をする。

<第2次> みんなの絵を並べてみよう。

- ・それぞれの作品について、抱いた感情や思ったことを発表し合う。
- ・その中からイメージを膨らませて作品のタイトルを決定する。

(5) 評価

・Lグループ

①平版デカルコマニーの制作を十分に楽しめたか。

②制作によって何らかの感情を体験できたか。

・Mグループ

①平版デカルコマニーの制作を十分に楽しめたか。

②作品に対して素直に感じたことを発表し、イメージを膨らませることができたか。

・Hグループ

①制作中に感じた様々な感情を言葉で表現できたか。

②作品に対して素直に感じたことを発表し、イメージを膨らませて決定できたか。

(6) 生徒作品

・Mグループ 作品1-N. F (図1)

ローシェンナーを基調として緑と赤のアースカラーでまとめられている。色彩感覚の優れた生徒であるので「きれいだ」という言葉を多く発した。タイトルは「地球」である。

・Mグループ 作品2-Y. Y (図2)

描画をあまり得意としない生徒だが、この制作には当初から強い興味を示し、この作品にも「面白い」「おいしそう」などという感情を持ち、「顔」「ヤサイ」などと、イメージを拡げた。

・Hグループ 作品3-N. T (図3)

描画も得意としており、この制作にも意欲的に取り組んだ。「すごい」という言葉を多く発したので、どうすごいのかを問うことで、「不気味な」という認識を喚起することができた。タイトルは「紫の太陽」である。

・Lグループ 作品4-Y, H (図4)

自閉症的傾向を持つこの生徒は色彩をきれいに配列し、どういうわけかこの作品に「トラ」というタイトルを付けた。黄色と緑を中心とした画面はなるほど密林のトラのイメージがある。

(7) 考察

この実践ではいかに生徒の制作意欲を高め、それを持続させるか、いかに生徒の感情を表出させるかの2点に注目して授業を進めていった。前者についてはほとんどの生徒が平版デカルコマニーを未体験であることから、強い興味を示した。後者については教師自身が生徒を良く観察していれば、その表出が分かるので、その瞬間を逃さず発問することで、多くの生徒が活発に感情を示すようになった。しかしながら、教師が感性に期待しない生徒については発問も少なくなりがちで、感情の表出もあまり活発とはいえなかった。この題材においては、教師は生徒一人一人への先入観をすべて取り払い、生徒すべての感性や内面に期待しなくてはならない。また国語科との連携も今後、図っていきたい。

(宮崎 龍次)

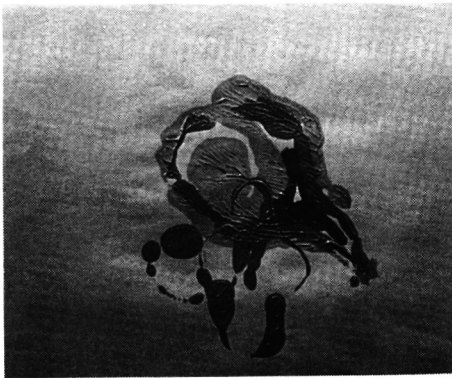


図1



図2

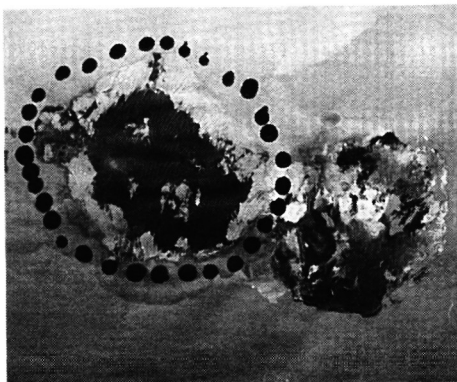


図3

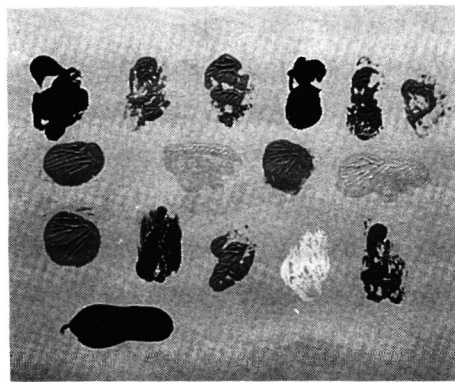


図4

2 「色紙ぶろっくであそぼう」

－発達の差の大きいクラスにおける、同一教材での負荷調整のために－

この題材を設定したクラスは、MA 3歳半からMA 9歳前後までの幅広い生徒で構成される高等部1年生のクラスである。描画発達段階では、意味づけ期から前写実期までの生徒がクラス内に存在する。また、自閉症児1名、自閉症的傾向を持つ生徒2名が居り、発達の差とも合わせて動機づけが非常に困難なクラスである。

また、発達の差は制作方法や手順にも多分に影響するので、すべての生徒を飽きさせず、しかも適度な負荷を与える教具が必要となる。以下は筆者が考案した題材である。

(1) 題材設定

ポール・セザンヌはすべての物体は球と円錐と円柱からなると言ったが、この理論は現在でも絵画の中に応用されている。例えば、円、三角形、四角形（それぞれ球、円錐、円柱の平面形）の様々な色画用紙を画面上にまるでブロックあそびのように積み重ねることで、絵画の制作が可能となる。この方法によれば貼付する前に配置を確認することができるので、失敗することも少なく、すべての生徒に作品完成の喜びを味わわせることができる。しかも生徒の発達の程度に合わせて、色紙ぶろっく的设计、切り抜きなどの作業で負荷を調整できるので、発達の差の大きいクラスでも対応できる。

これらの活動を通じて、生徒が最後まで飽きずに制作し、作品完成の喜びを味わい、適度な負荷により手先の器用さを養うことができるようこの題材を設定した。

(2) 指導にあたって

指導に当たって以下の5点に留意した。

- ①導入では教師の作った色紙ぶろっくをブラック・ボックスに入れて、中からまるで魔法使いのように色紙ぶろっくを取り出し、生徒の興味を引く。
- ②制作方法をプリントし、実際に練習をさせて理解を促す。
- ③形態把握の可能な生徒には、独自の色紙ぶろっくを設計させる。またハサミで複雑な形態を切りとれる生徒には、設計済みの色紙ぶろっくを切り抜かせる。ある程度ハサミを使用できる生徒には既製の色紙ぶろっくを用途に合わせて切断させる。これらの不可能な生徒にはなるべく多くの既製の色紙ぶろっくを画面に貼付させる。
- ④白い画面に色紙ぶろっくを貼付してもよいが、作品の完成度を増すために、色画用紙を使ったり、前もって、水彩絵の具でバックを塗らせたりすることが望ましい。
- ⑤色紙ぶろっくの配置は生徒に決定させ、教師の固定概念を押しつけないよう注意し、教師自身もどのような色や形が表出されてくるか、期待して授業を進める。

(3) 指導目標

- ・MA 3～4歳・・・Lグループ

- ①色紙ぶろっくを配置して貼付する作業を通して、手先の器用さを養う。
- ②作品の完成の瞬間の喜びを味わわせる。
 - ・MA 5～6歳・・・Mグループ
- ①色紙ぶろっくを切り抜き、思う場所に配置して貼付する作業を通して、さらに手先の器用さを養う。
- ②作品を制作し完成する喜びを味わわせる。
 - ・MA 7～9歳・・・Hグループ
- ①色紙ぶろっくを目的に合わせて設計し、思う場所に配置して貼付することで、空間知覚を養う。
また、さらに手先の器用さを養う。
- ②色紙ぶろっくを画面上に配置後、確認させ、より良いものを求める姿勢を身に付けさせる。

(4) 指導計画

- <第1次> 色紙ぶろっくって何だろう？
 - ・教師の試技を見て色紙ぶろっくの制作方法を知る。
 - ・プリントに色紙ぶろっくを貼付して制作の練習をする。
- <第2次> アイデアスケッチをしよう。
 - ・色紙ぶろっくでの制作を念頭においてスケッチする。
- <第3次> 色紙ぶろっくでつくろう。
 - ・B3ケント紙に、自由な色彩でバックを塗り、その上から鉛筆でスケッチを見て当りを付ける。
 - ・色紙ぶろっくを使用して制作する。
- <第4次> みんなの絵を並べてみよう。
 - ・全員の絵を並べて鑑賞し、それぞれに苦心した場所などを発表する。

(5) 評価

- ・Lグループ
- ①色紙ぶろっくを配置して貼付する作業を通して、手先の器用さを養うことができたか。
- ②作品完成の喜びを十分味わえたか。
 - ・Mグループ
- ①色紙ぶろっくを配置して貼付する作業を通して、さらに手先の器用さを養うことができたか。
- ②作品を制作完成する喜びを十分味わえたか。
 - ・Hグループ
- ①色紙ぶろっくを目的に合わせて設計し、思う場所に配置できたか。
- ②画面上の配置を十分に確認して貼付したか。
- ③制作を根気強く進め、さらに手先の器用さを養うと同時に、制作と完成の喜びを味わうことができたか。

(6) 生徒作品

・Lグループ 作品5-Y, I (図5)

バックはバートンシェンナーとバーミリオン、色紙ぶろっくは赤の四角と黒と赤の円である。畑の耕運機を表現している。脳性麻痺を持つこの生徒は描画では全く作品にならなかった。

・Lグループ 作品6-Y, S (図6)

緑色を基調とし、カラフルな色紙ぶろっくが配置してあるこの作品は「花園」である。配置がとても良い。

・Mグループ 作品7-M, M (図7)

空を飛ぶ旅客機である。既製の色紙ぶろっくを切断して配置し、新しい形態を生みだしている。

・Hグループ 作品8-T, F (図8)

まだ制作中である。思い通りに色紙ぶろっくを設計し、切断し、配置している。配色もよい。

(7) 考察

この題材の大きなポイントは、生徒の能力に合わせて負荷を調整できることであるが、その意味においては大きな収穫があったと思われる。一旦制作に入った生徒は、一部を除いて最後まで飽きずに作品に取り組み、ほとんどの生徒が作品を完成させた。しかし導入では完成作品例がなかったため、生徒に戸惑いを与え、Lグループで神経質な生徒H, Nは、バックを塗ったのみでこの授業を終わった。この様に神経質な生徒への対応が今後の課題となる。

(宮崎 龍次)

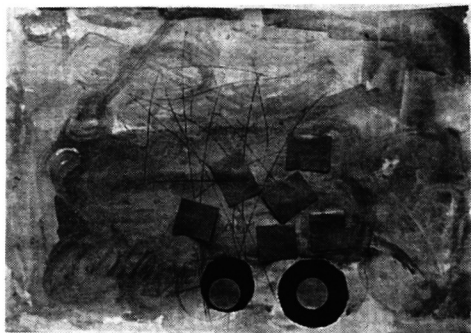


図5

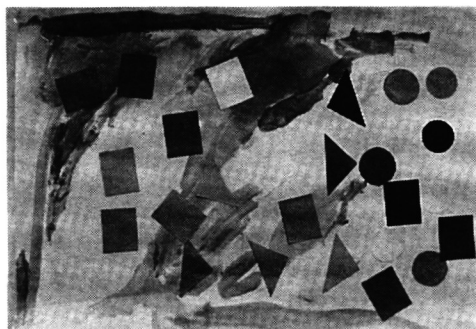


図6

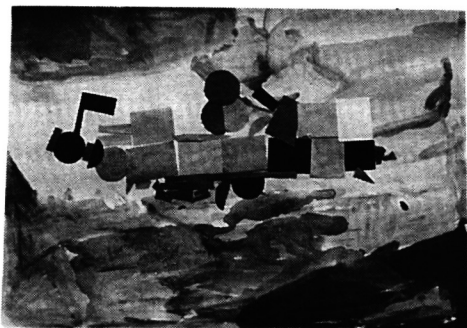


図7

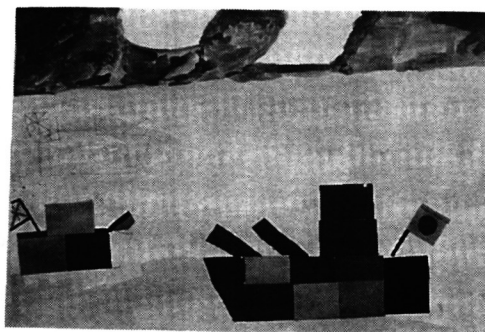


図8

3 「スチレンボードによる版画」

(1) 題材設定

版画の特性はその制作過程において、描く・彫る・刷るという手順を踏まえた順序性にあり、制作に当たっては完成への見通しが必要とされる。しかしそういった面は、精神薄弱の生徒にとって、そういった面は不得手とされるが、手順を踏まえて作品が刷り上がったときの完成の喜び、達成感は大いに期待することができる。

そこで、ここでは、版としてスチレンボードを用いる版画を題材とした。スチレンボードは筆圧を加えることにより容易に線を彫ることができ、手先の不自由な生徒にとっても扱いやすい材料である。それにより、彫るという行程での抵抗感が少なくなると思われ、その後、徐々に取り扱う材料を抵抗感のあるものへと発展させていきたい。

(2) 指導にあたって

指導に当たっては、以下の4点に留意した。

- ①導入の段階では、野菜、はっぱなどを用いたスタンプ遊びから入り、偶然の形の組み合わせから、意図的な形を作ることへと発展させていく。
- ②モチーフとする紫陽花を一人1本あて用意し、手に取って観察させる。下描きには版よりもひとまわり大きな紙を用い、版を作る際にトリミングを行う。
- ③それぞれの行程について、段階を終えたことを生徒にはっきり告げ、手順を少しでも理解させる。
- ④生徒の作品で、試し刷りの師範を行い、刷り上がりを全生徒で楽しみ、達成感を得させる。

(3) 指導目標

・Hグループ

- ①版画の手順を理解し、制作できるようにする。
- ②一版一色刷りから、一版多色刷りに発展できるようにさせる。

・Lグループ

- ①版画がどうやってできていくのかを知り、制作できるようにする。

(4) 指導計画

<第1次> スタンプ遊び

- ・じゃが芋、玉葱、はっぱなどを用いてスタンプを押し、絵を作る。

<第2次> 下絵制作

- ・紫陽花の花を観察して描く。ひとつの花、1枚の葉をクローズアップして描く。
- ・Hグループの生徒には全体を見てバランスよく描けるように指導する。

<第3次> 製版

- ・下絵よりトリミングを行い、版に転写する。

- ・転写された線を鉛筆などでなぞる。線の深さが1～2ミリ程度になるように注意する。
- ・細かくて描写の困難な部分は省く。

<第4次> 試し刷りと修正

- ・ポスターカラーを使用し、試し刷りを行う。不鮮明な部分、描きたらない部分は修正を行う。

<第5次> 本刷り

- ・本刷りを行う。Hグループの生徒は多色刷りにも挑戦する。

(5) 評価

・Lグループ

①版画の方法を知り、作品を完成させることができ、その喜びを味わえたか。

②紫陽花の花をよく観察できたか。

・Hグループ

①版画の手順を理解し、作品を完成させることができ、その喜びを味わえたか。

②紫陽花の花を観察し、表現できたか。

(6) 生徒作品

・Lグループ 作品1 K, S (図9)

葉は、葉脈まで表現できたが、花の観察・表現が不十分である。版画の手順は、その時々、個別に指導を行えばだいたいできる。それぞれの過程を全体の流れの中の一つとして理解してはいないようだが、最後に作品が出来上がったときは、大変喜んでいて。

・Hグループ 作品2 Y, I (図10)

まだ表現は概念的である。版画の手順は全体指導だけでかなり理解できた。一版多色刷りにも挑戦し、完成した作品にはかなり満足していた。

・Hグループ 作品3 H, I (図11)

これまでかなり概念的な表現が多かったが、今回の作品においては、観察・表現ともによくできている。授業態度も今までは浮ついていて他のことに気を取られることが多かったが、今回はおしゃべりもせず授業に専念できた。手順もほぼ理解し、刷り上がったときには非常に喜んでいて。

・Hグループ 作品4 K, K (図12)

描写力がかなり高い生徒で、今回も形態を適格に表現している。少々細部まで描き込みすぎた点もあり、版を作る段階で苦心していたが、花のひとつひとつもきれいに刷り上がり、満足していた。

(7) 考察

この題材は版を作ることが簡単であったことに加えて、刷り上がりも美しく生徒はかなり満足していたようだった。版画の中でも、やはり「刷る」という行為が、最もたのしいらしく、何枚も刷る生徒もいた。

Hグループの生徒はそれぞれの行程を一連の流れとして理解することが、ほぼでき、今後、石膏版画や、木版がなどにも発展させていくことが可能である。Lグループの生徒も「彫る」「刷る」という流れは大体理解できた。

今回使用した教材についての留意点であるが、スチレンボードは扱いやすい反面、破れやすいのでその点では注意が必要である。また、今回は一版多色を行うために、ポスターカラーを用いたが、絵の具のつきが悪い、水の量の調節が難しいなどという点で、幾分刷り上がりに影響が出た。教材教具に対する研究は、かなり綿密に行う必要があろう。

(石川 昭枝)



図9



図10



図11

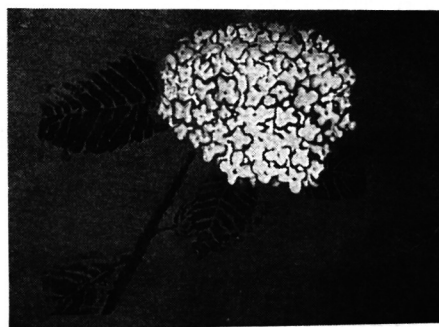


図12

4 岩国養護学校における美術教材

岩国養護学校高等部は3年前に設置されて、本年度で3学年すべてがそろい、今年度初めて卒業生を送り出すことになる。本校の美術の授業は1年生から3年生まで混合の縦割りの形態を取っており、全体をH、M、Lの3つのグループに分けて授業を行っている。

担当のグループはMなので、HとLに関しては何とも言えないが、MのグループはHとLに比べる

と生活年齢の開きが大きいと思われる。Mグループは8名の生徒で手にマヒのある生徒が2名うち1名は車椅子、自閉症の生徒が2名である。他にダウン症が2名、精薄という生徒構成で、MA3～4歳からMA10歳程度であると思われる。

理解力があってもマヒのために表現のできない生徒もいるので、題材設定が難しいが、個々の実態に応じそれぞれの目標を設定し、題材に関してはオーソドックスな内容から発展した内容まで幅広く対応していきたいと考えている。実際にはまだ授業で扱っていないものもあるが、体験することの大切さを忘れないで授業内容を考えて行く必要がある。

大きく、絵画、デザイン（平面）と彫塑（立体）からなるべく広範囲に課題を精選していく。（このことは特殊教育に限らない。）

平面 ■ 素材の面から

①紙、用紙の種類から選んでいく

（画用紙、ケント、コットン、色つきのものなど）

②表現する素材

鉛筆、クレヨン、マジック、パステル、絵の具類（水性から油性まであらゆるもの）

上記の素材の面から①と②あるいはそれ以上の混合技法で、生徒たちへの表現の幅を広げていけるのではないかと。この組み合わせも簡単なものから複雑なものへと進めていけば、平面だけでも1年間の授業の中ではとても消化しきれない技法を考えられると思う。技法の面からのアプローチと題材（何を描くのか）設定の組み合わせでかなりの幅を持たせられると思う。

立体については、

■ 粘土の種類から

紙粘土、油粘土、焼きもの粘土（テラコッタ用 e t c.）

■ 石彫、木彫、彫金（打ち出し等）

■ その他工芸分野から

立体では粘土が最も扱いやすい素材と思われるが、石や木材、金属なども授業に取り入れていくことで、また違った表現手段を生徒達は見いだす可能性はおおきいのではないだろうか。石や木が難しければ石膏や発砲スチロールなども考えられる。

粘土の素材だが、これも種類が多く、紙粘土であれば完成後に簡単に着色できるし、焼きもの粘土では素焼き（テラコッタ）から釉薬がけで重厚な完成度を持たせ、生徒にかなりの完成度を味わわせることができる。

この様に平面も立体もそれぞれに様々な課題を組むことが可能となる。

本年度の実例として、以下のような題材を考え、実践している。

A、立体 ■ 粘土制作（粘土で作る私の顔）

授業計画 ①粘土で自由に作ってみよう。

②顔の制作1

③ // 2（仕上げ）

④石膏どり1（雌型づくり）

⑤雌型に粘土をつめる

→教師：雌型から取り出す

素焼きをする

⑥釉薬がけ

→教師：本焼き

⑦石膏どり2（はくり剤塗布）

⑧ // 3（雄型流し込み）

⑨ // 4（雄型割り出し）

（⑤までが1学期 図13、14）

B、平面＝絵画

①鉛筆画（手を描く）

② // （静物）

③ // （グラデーション）

④ // （友達を描く1）

⑤着彩（友達を描く2）

⑥ // （ // 3）（図15、16）

■デザイン

①クリスマスカード（マーブリング油性）→練習

② // （マーブリング水性）→ //

③ // （水性→油性）

④ // （スパッタリングによるレタリング）

Aの立体はロングのカリキュラムで、雄型に粘土をつめるところで1学期を終え、素焼きまでを教師がやって2学期の文化祭（学習発表会）に向けて平面のあいまを見て釉薬がけをし、本焼きは教師が行った。

本題材で石膏を含めたのは、作品を確実に残せるようにとの配慮と、テラコッタとしてお面の状態を作るのに一旦型取りで行うほうが生徒の実態を考えたとき適当な教材であると考えたからである。またテラコッタとして、釉薬がけをし本焼きをしたのはこの課題において可能なかぎりの内容を盛り込んだ結果である。

Bの平面では鉛筆での描画について考えてみた。鉛筆での表現として強い線から弱い線あるいは黒の中の階調などを注意しながら描かせてみた。それぞれに個性のある作品が多く彼らの発達段階もよく読み取れるようであった。この課題は鉛筆で描くことから着彩（水彩）へ発展させてカリキュラムを組んでみた。鉛筆画での結果と同じように、それぞれの個性がよく出ていた。また鉛筆の表現と、着彩の表現では同じ傾向の作風が如実で、鉛筆画を見る時繊細な表現は着彩でも淡い色調だったり、力強い鉛筆画なら強烈な色彩だったり、その生徒の内面がストレートに表われた作品が多かった。

マーブリングでのクリスマスカード作りでは、油性、水性のどちらもさせてみて、混合技法でスパッタリングによるレタリングを取り入れてみた。この課題は完成感や達成感を得られる題材として組ん

でみた。完成感や達成感、自信を持たせることにつながって行くのではないか、美術ではそういう自信やそれによる意欲の増進、そして自らが少しでも自分の力でやっていける力を伸ばすことが大切なことだと考える。

本年は、比較的ロングのカリキュラムを組んでみたが、短い課題でも長い課題でも、より多くの内容を含ませて様々な体験をさせてやるのが大切ではなかろうか。それと先にも述べたように自信を持たせて自ら取り組む習慣を養わせたい。

さらに付け加えるならば、逆に失敗することも知るべきであろう。それによってさらに伸びることのできる力を養えるのではないだろうか。

(島田 憲貢)



図13



図14



図15



図16

5 「お面づくり」

(1) 題材設定

お面づくりは生徒にとって興味・関心の高いものであり、特別な教材を必要とせず、比較的容易に制作できる題材である。この題材は個々の個性が作品の形や配色に表われるとともに、制作工程のそれぞれにおいて、集中して取り組む傾向にある。お面は昔から今日まで様々な形で生活の中に取り入れられてきたが、ここでは現代的な生徒自身の考えを取り入れた表情のある色彩を考えて作る楽しさを味わわせたいと考え、この題材を設定した。

(2) 障害の実態

- ・精神薄弱：軽度（IQ 50～75）37名・中度（IQ 25～49）13名
- ・併せもつ障害

ア 自閉症・自閉的傾向（7名） イ てんかん（4名） ウ 構音障害（2名）

エ 斜視（2名） オ 側彎症（1名）

本学年の生徒は学習に対する集中力や持続力についてはついてきているが、学習態度は受け身で主体的に学習できる生徒はあまり多くはない。特に美術の授業では、新しい表現の工夫や技術的な応用力の不足を感じている。生徒の美術に対する意識には、絵を描いたり、何かを作ったりすることは難しいという気持ちがあり、また、表現活動を見ると基礎・基本が確立されておらず客観性に欠けている面がある。また、生徒の諸能力の差が著しく、さらに情緒面に問題があったり、依頼心が強いなどの問題があり、理解度や進度も様々で積極的に個別指導を行う必要がある。

(3) 指導にあたって

お面づくりでは、生徒の「こんなものを創りたい」といった表現課題を一人一人に持たせうえて、見方や考え方、感じ方を大切にし、自己表現の過程を通して、表現能力を養っていけるように次の点に留意した。

- ① 下絵では生徒の自由な発想を認め、さらに発展できるようアドバイスをを行い、創造する楽しさを味わわせる。
- ② 彩色では、自分だけの色として混色を取り入れるとともに、カラフルな色使いや配色の効果に気付かせる。
- ③ 立体的なお面をつくることで、工作的な面での満足感や、作品として完成させようとする気持ちや喜びを感じさせ、愛着を持たせたい。
- ④ 立体的なお面をつくる際、自分一人で骨組みをつくるのに、技能面でのつまづきのある生徒には、教師が手を貸し、生徒には可能な部分をできるだけさせて自信を付けさせ、強い劣等感を感じさせない。

(4) 指導目標

- ・お面づくりの手順を理解させ、その楽しさを味わわせる。
- ・厚紙を使い立体表現を工夫させる。
- ・根気よく和紙を貼り、丁寧に仕上げるようにさせる。
- ・形や色を工夫してデザインさせる。(配色・構成の工夫)
- ・目的意識を持ち、主体的に学習させる。

(5) 指導計画 (約20時間)

<第1次> 教師が用意した教材をもとに、どのようなお面にするか話し合い、下絵を描く。

- ・目、鼻、眉毛などの特徴を大きく捉える。
- ・目、鼻、眉毛などの配置の工夫をする。
- ・感情表現の工夫をする。
- ・実際につくるお面と同じ大きさで下絵を描く。
- ・生徒自身の考えを形や模様にかかすように働きかけ、表現課題にさせる。

<第2次> 水彩絵の具による彩色

- ・絵の具の濃さや塗り方を工夫して彩色する。
- ・混色や配色の工夫をする。
- ・黒白、グレー、黄などの色で縁取りをする。

<第3次> 厚紙による骨組み作り

- ・2×35cmのケント紙をホチキスで止めて作る。
- ・大きさは下絵に重ねて測る。

<第4次> 和紙貼り

- ・根気よく和紙をちぎり、骨組みに貼る。
- ・輪郭となる部分から少し重なる程度に貼る。

<第5次> 下地塗り

- ・シルクスクリーン用インク(白)を筆で下地塗りの手順に添って、和紙のつなぎめが見えなくなる程度に丁寧に塗る。

<第6次> お面に下絵を描き入れる

- ・紙に描かれた下絵を立体のお面に写すとき、上の面だけでなく側面まで描き入れるようにする。

<第7次> 水彩による彩色

- ・下絵を見ながら、できるだけ似た色できるように工夫して彩色する。
- ・絵の具の濃さや塗り方に注意して、側面まで塗る。
- ・完成した作品はハトメで止め、紐を通す。

(6) 評価

- ・見たことや想像・観察したことを画面に表現できたか。
- ・表現方法を工夫して表わせたか。
- ・目的に合わせて用具を扱うことができたか。
- ・進んで学習に取り組めたか。

(7) 考察

自分が考えだした絵が、自分の手で立体的なお面になることは、子どもたちにとって喜びと感激を味わえるものであったのではないだろうか。

この実践で注目して行ったのは「こんなふうに創りたい」といった子供達の願いを少しでも多く引き出すことであり、また、作品をイメージにできるだけ近付けるよう制作していくことで、創作する喜びや楽しさを味わわせることである。美しいものや楽しいものを作り出そうとする心は、人間性豊かな子供の育成だと考えられる。情操を養う美術教育の役割の大きさも、真にそこにある。このお面づくりで、子供たちが楽しいと感じることができ、何時か生活の中で”お面をつくってみようかな””絵を描いてみようかな”という気持ちが持てれば、すばらしいことだと思う。お面づくりでは、まず<第1次>の下絵の形を工夫することでイメージを膨らませていくが、形を工夫する前に、どういったお面を創ってみたいかという心があると考えられる。そのため、ここでは子供達の自由な発想で下絵描きを行った。これは想像の絵であるが、想像の絵を描かせる目的は、子供の願いや夢を押し広めることである。教師は子供達のイメージが広がる資料作りを行う必要があるので、次のような資料を作成した。(資料1)

このハート型の顔に、お面が引き立つように工夫しながら目や鼻、口を置くのである。同じ目でも①と②ではどのような感じを受けるか、また、目を上げたり、下げたりすることだけでも笑った感じ、悲しい感じなど感情を表現することができ、演示する中で、「こうすると、どんな感じがする?」「そのために、どんな工夫をするかな?」などの発問を行い、好奇心を引き出し、下絵描きのポイントに気付かせることができた。

また、机間巡視で個別指導を行う際は、その子の考え方、見方を知ることができるような発問を行ってみた。一人一人の考えを大切に、決して教師が否定したりせず、どのような答えにも「とっても面白い考えだよ」と認め、どんどん取り入れるようアドバイスを行ってみた。生徒が「えっ、こんなことしていいの?」といった驚きの感じを持った様子も見られた。教師が少し手を添えるだけで、子供達は自分でどんどん良い考えを出していけるのである。実際に描いた絵を見ると、教師の予想を越えてじつに楽しい自由な発想のお面ができたことは驚きであった。いくつかの例をあげると、

- ・顔の中に天の川が流れ、オリオンやカシオペアなどの星座が輝いている。
- ・顔からうどんやラーメンの丼の角が出ている。
- ・顔がいろいろな光の帯からできている。(図1 7～2 2)

などである。また、車に詳しいA君は目や鼻や口など、すべて車の部分で描いている。(図2 3) 日常、三角形や矢印にこだわりを持っているS君は、図2 4のように三角形の形を多く用いて描いている。

これは子供達の見方や考え方など、生活経験が出せるような聞き方をし、子供達の意見を尊重して生かすように心掛けた指導によるものと考えられる。子供は自分の考えが絵が生かされることが嬉しいのである。その子の見方や考え方を大切にして表現させることにより、その子なりの良さや個性の現われとして捉えることができると考えられる。

また、子供達は自分で工夫して表現を切り開いていくのではなく「ここまでできた。次、どうすればいいの?」と、常に教師と対話しながら自分のイメージを創っていくことが分かった。今後はさらに形、色、素材、感じなどにこだわらせ、追求していく指導を行いたい。

追求することで、より美しいもの、より楽しいものへ進む新しい一歩が発見されると考える。一つのものにこだわりをもって創っていかなければ、そのものを深く理解することはできず、中途半端な上辺だけのものになってしまう。また子供達はほかの子供が追求した表現を見て取り入れるが、その時、その子なりの見方や考え方が加わり、さらに良いものを生み出す。お互いが高めあって、より高いものへと追求していくのではないだろうか。〈第1次〉では形の追求だけであったが、その先には色の追求がある。このようなこだわりを意欲的に行わせるために、教師の資料も必要となるが、それは生徒が模倣するような完成されたものであってはならず、子供の創る力、意欲が沸き上がるものでなければならぬ。そして難しいことであるが、自分の考えを見直したり、追求していけるような授業を展開することが、一人一人を大切に授業といえるのではないだろうか。

(玉川佳寿美)

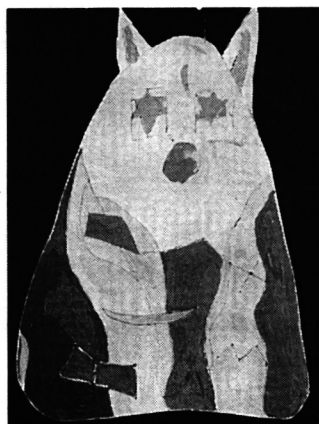


図17



図18



図19

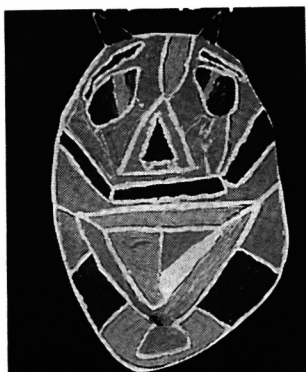


図20



図21



図22

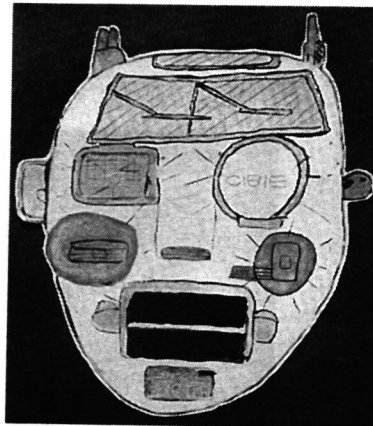


図23



図24

注

- 1) 秋山泉 福田隆真 宮崎龍次 浜崎佳代子 「養護学校における美術の教材に関する考察」
山口大学教育学部研究論叢 第40巻第3部 1991年

付記

本稿の作成に当たり、山口県立田布施養護学校、同徳山分校、岩国養護学校、北海道中札内高等養護学校の協力を得た。ここに感謝いたします。また、全体の企画を秋山、福田が行い、1、2、を宮崎、3を石川、4を島田、5を玉川が担当し、全体のまとめを福田、浜崎が行った。